

安城市惣作遺跡出土の 刀把装具について

樋上 昇・早野浩二

本稿では、平成23年度に発掘調査をおこなった安城市惣作遺跡から出土した、木製の刀把装具を紹介する。併せて、この刀把装具の使用樹種とAMSによる年代測定値の公表、さらにその系譜についても若干の考察を加える。

鹿乗川流域遺跡群と惣作遺跡

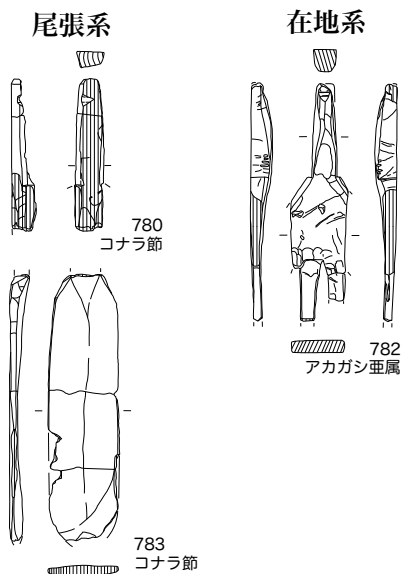
惣作遺跡は愛知県安城市木戸町に所在している。地理的には西三河を南北に貫く矢作川の右岸、碧海台地との境に位置し、南北4km以上、東西1.6kmにおよび、時期的には縄紋時代晩期後葉から古墳時代後期前葉にいたる「鹿乗川流域遺跡群」のほぼ南端にあたる（図2 考古学フォーラム2013）。

愛知県埋蔵文化財センターでは、碧海台地の縁を流れる鹿乗川の河川改修にともない、平成

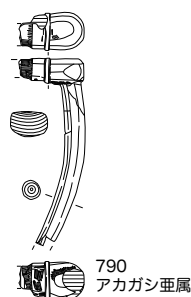
12（2000）年度より継続的に発掘調査を実施しており、北から上橋下・宮下・姫下・寄島・下懸・五反田・惣作の7遺跡について調査をおこなっている。特に上橋下・姫下・下懸・惣作の4遺跡では、鹿乗川の旧河道より多数の木製品が出土している。

惣作遺跡では、平成20（2008）年度の調査で弥生時代中期後葉（古井式期）から江戸時代後期にかけての木製品150点が出土している（愛知県埋蔵文化財センター2012）。このうち特に中心となるのが鹿乗IV-3c～V-1b期（欠山式期新段階～元屋敷式期古段階・廻間Ⅱ式期

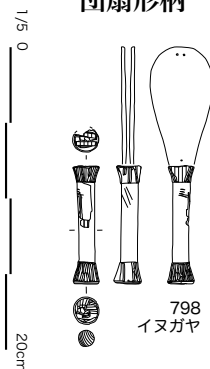
南群（惣作遺跡）出土主要木製品 伊勢湾型曲柄平鋏 伊勢湾型曲柄四又鋏



横斧柄（袋状鉄斧）



団扇形柄



カゴ底板

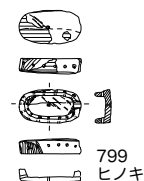


図1 惣作遺跡出土の主要木製品 (S=1:5・1:10)

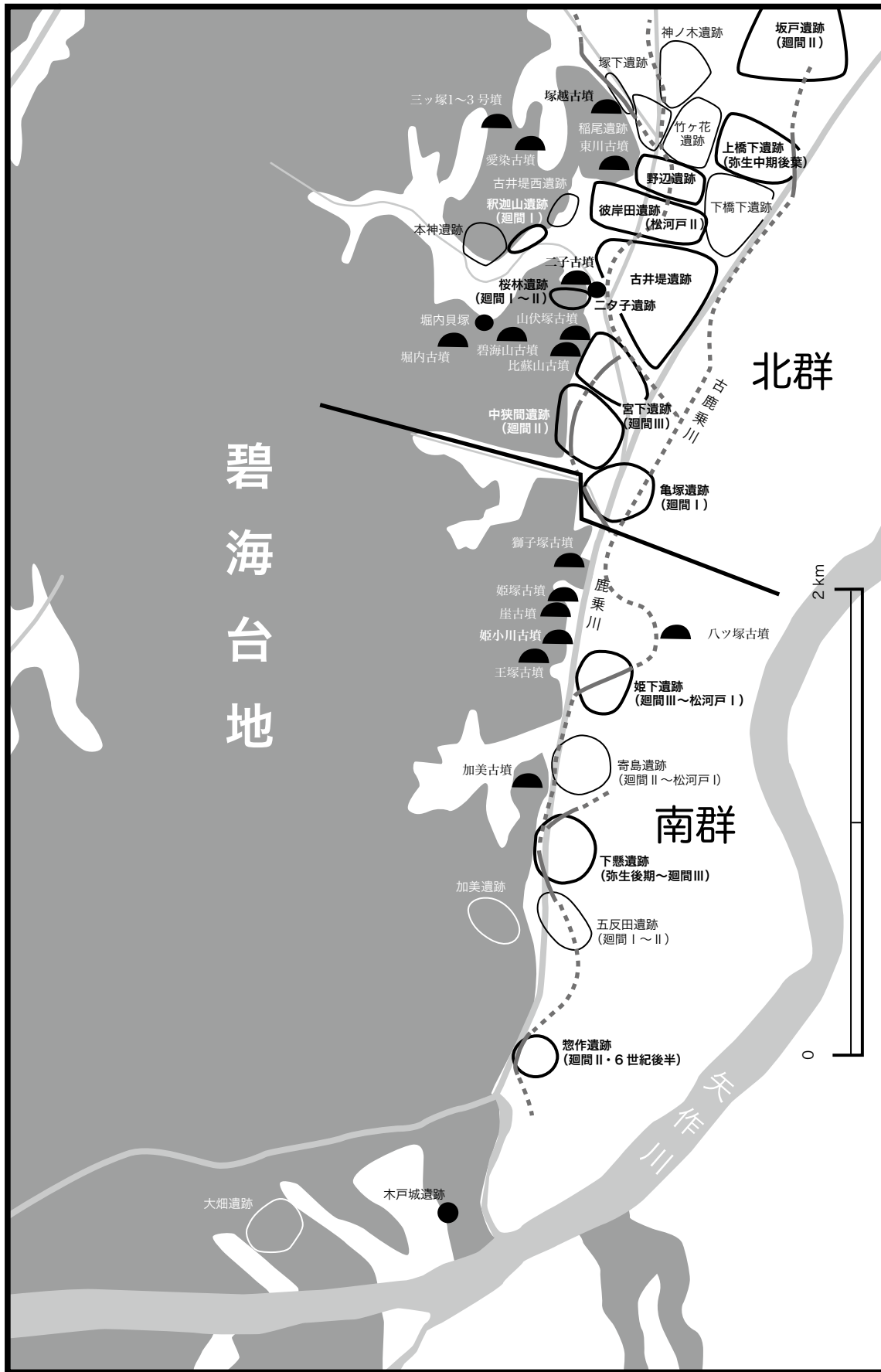


図2 惣作遺跡と鹿乗川流域遺跡群 (S=1:25,000)

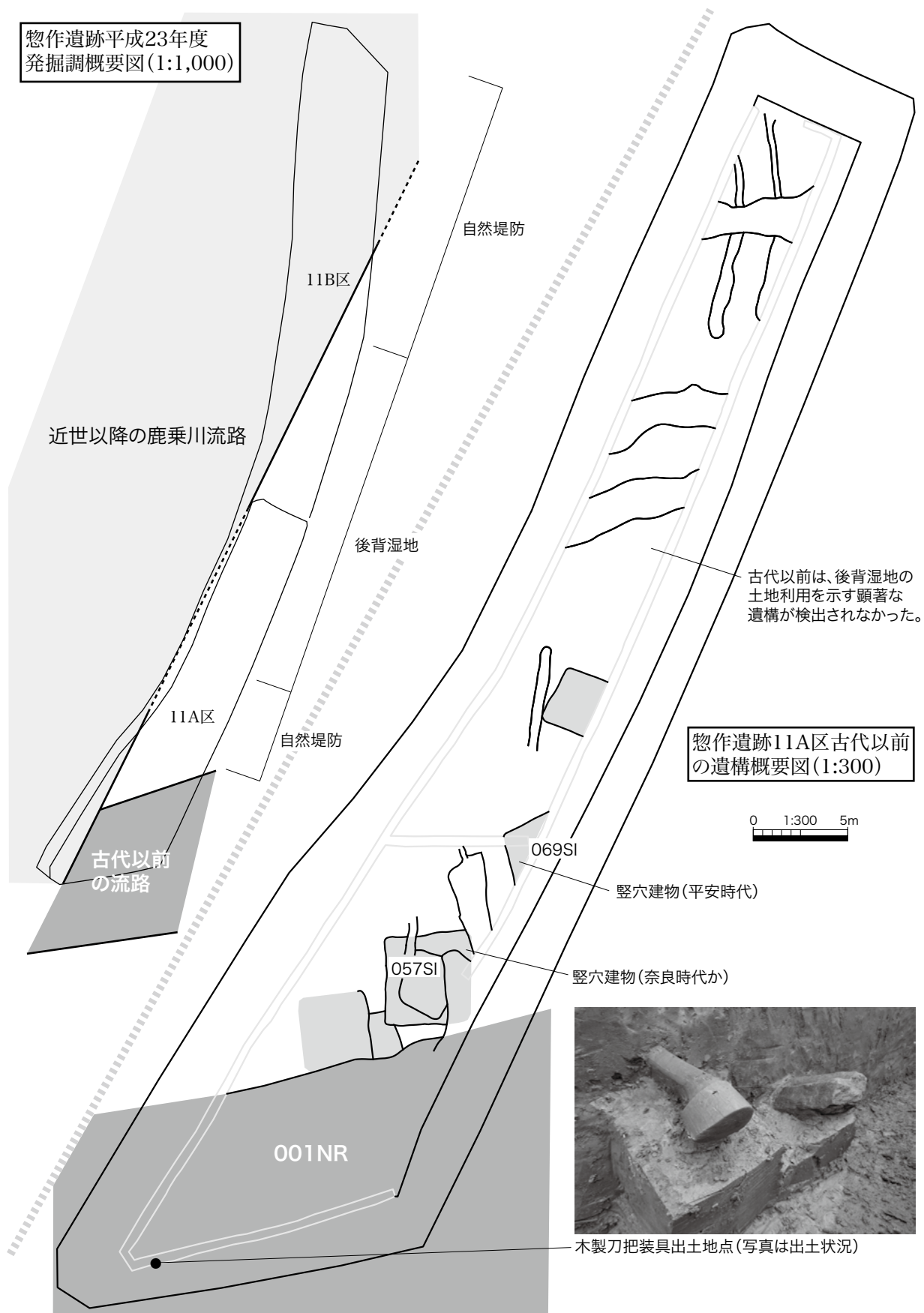


図3 惣作遺跡の遺構と刀把装具出土地点 (S=1:300・1:1,000)

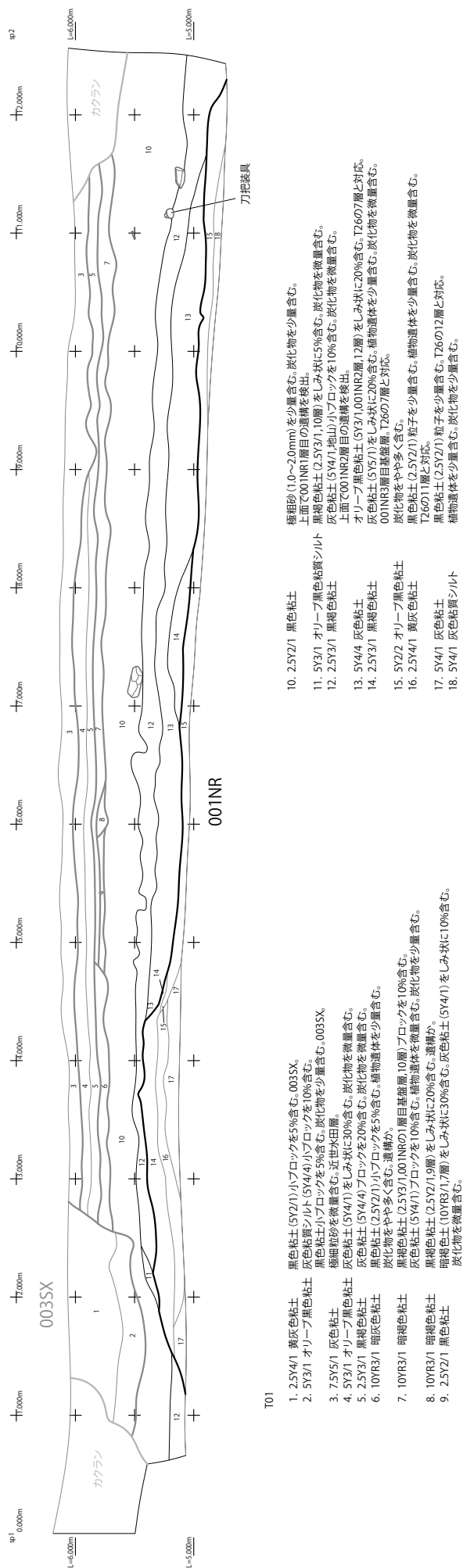


図4 刀把装具の出土層位 (1:50)

並行期)に属する82点の木製品群である(図1)。この時期には、弥生時代後期から古墳時代前期の威儀具として重要な位置を占める団扇形(図1-798)のほか、装飾性の強い横斧柄(図1-790)など、当該期に首長がこの惣作遺跡に居住した可能性を示す木製品が出土している(樋上2012)。

次いで量的に多いのが古代(8世紀初頭~10世紀前半頃)の32点である。この時期の木製品では、「道大巻 得得麻呂 得□□[巻カ] 大 □天平護田 呉部足国 == (戯画カ)」と書かれた習書木簡が注目される。本遺跡から西に300mの碧海台地上には7世紀後半創建の寺領廃寺が位置し、本遺跡内にも当該期の掘立柱建物と竪穴建物が展開している。

刀把装具の出土地点と出土状況

本稿で紹介する刀把装具は、平成23年度の11A区から出土した。

北から流れてきた鹿乗川の旧河道が、遺跡の中心部が乗る微高地の縁辺をめぐるように北東から南西に傾いてこの調査区の南端をかすめ、さらに南では北西から南東方向へと向きを変える。この旧河道の北側には奈良~平安時代の竪穴建物6棟を確認している。件の刀把装具はこの旧河道(001NR)で、調査区南西隅のトレンチ内から出土した(図3)。

河道001NRの堆積状況は大きく、上層:黒色粘土層(図4-10・11・12層)と下層:灰色粘土層(図4-13)に分かれる。そして下層から古墳時代前期初頭(鹿乗IV-3c~V-1b期・欠山式新段階~元屋敷式古段階・廻間Ⅱ式並行期)、上層から古墳時代前期(鹿乗V-2a期・元屋敷式新段階・廻間Ⅲ式並行期)から奈良時代にかけての遺物が出土している。図4をみてもわかるように、刀把装具の出土地点は上層の10層と12層のほぼ境目である。

ただし古墳時代前期後半(鹿乗VI-1a期・神明Ⅰ式期・松河戸Ⅰ式並行期)で本遺跡はいったん途絶え、この次に出てくる土器は、岩崎17号窯式期(7世紀第3四半期)~岩崎41号窯式期(7世紀末~8世紀初頭)である。

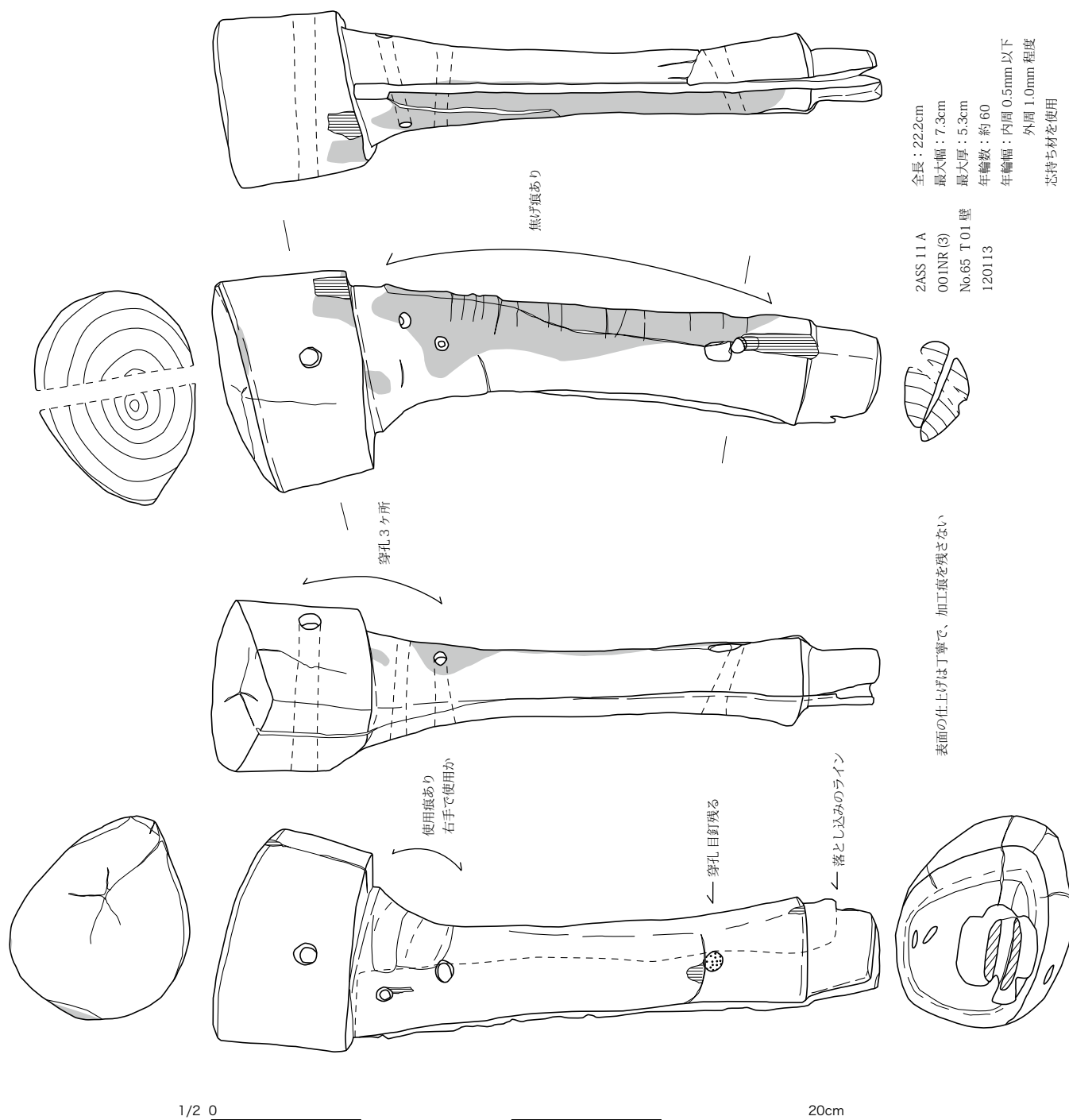


図5 刀把装具実測図 (1:2)

刀把装具の概要と特徴

材は(株)パレオ・ラボによる樹種同定の結果、ヤブツバキ(ツバキ属)の芯持ち材を用いていることがわかった。

型式学的にはいわゆる倭系(倭風)大刀の把で、把頭が楔形を呈する置田雅昭によるB類の系譜に属する(置田1985・山内2003)。この把頭B類は、直弧紋など紋様のあるもの(B-1類)と無いもの(B-2類)に分けられており、本例はB-2類に属する。

サンプル
採取箇所
↓



写真1 刀把装具の展開写真

ただし、把頭の断面形状は楔形というより、滴形ないしは卵形を呈している。把頭と把間(持ち手にあたる箇所)は直角ではなく、やや傾斜して接続している。さらに把縁(鞘に接する箇所)は、把間より一段浅い段をもってすばまる形状を示している(図5・写真1)。

穿孔は把頭に1ヵ所、把間に3ヵ所認められる。このうち、把頭の1ヵ所と把間のうち把頭寄りの2ヵ所は貫通しているが、把縁寄りの1ヵ所には目釘が遺存している。

把間から把縁にかけては、刀の茎を挿入するための落とし込みがあり、把間の穿孔は、この茎と把とを結合するために開けたものと考えられる。

前述のように、この刀把装具は無紋であり、漆などを塗布した痕跡も認められない。ただ、把間の片面には、炭化した痕が残っている。

AMS 年代測定による所属時期

集落や古墳から出土する刀把装具のうち、最も出土例が多いのは、本遺跡例と同様のB類である(山内 2003)。そして、このB類の所属時期はおおむね5世紀後半から6世紀代に属する。

ただ前述のように、この惣作遺跡では鹿乘VI-1a期(4世紀前半頃)で集落はいったん途絶え、再び人が居住するのは7世紀第4四半期である。つまり、この把頭B類が全国的に盛行する5世紀後半～6世紀代の遺物が、本遺跡で

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-21434	遺構:001NR(3) 試料No. 65	種類:生材(ツバキ属) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 器種:刀の柄 状態:dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-21434 試料No.65	-26.06 $\pm$ 0.11	1464 $\pm$ 21	1465 $\pm$ 20	577AD(68.2%)623AD	561AD(95.4%)643AD

は皆無であるため、考古学的に実年代を確定する方法がない。それゆえ、(株)パレオ・ラボに依頼し、AMS年代測定法によって実年代を絞り込む方法をとることとした(表1)。

木製品の場合、AMS年代測定によって示される暦年代値は、使用された樹木の伐採(に近い)年代となる。そのためには、残っている年輪のうち、できる限り最外周でサンプルを採取する必要がある。この刀把頭では、写真1に入れた↓の箇所でサンプルを採取した。ただし、最終形成年輪は残念ながら遺存していない。

得られた結果が表2である。このうち ^{14}C 年代は、A.D.1950年を起点に何年前かを示している。ただ、動植物が取り込む大気中の炭素同位体(^{14}C)の濃度が常に一定ではないことがわかっており、それを補正するために、北半球での暦年較正曲線(Intcal09)を用いている(図

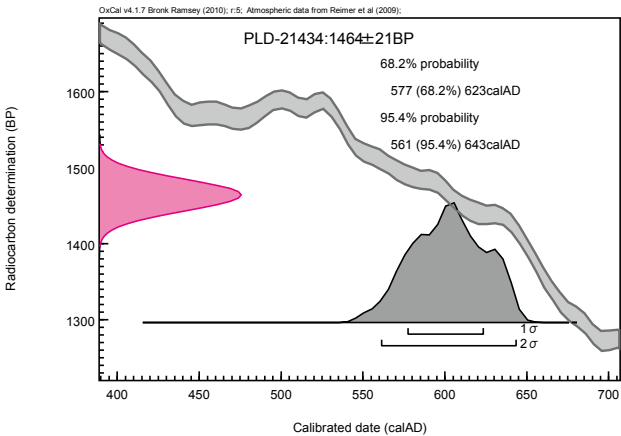


図6 暦年較正結果

6)。この暦年較正年代値を西暦年代に直したのが、表2のうちの右側の年代値である。

年代を絞り込んだ1 σ (1標準偏差)の値が577A.D. ~ 623A.D. (68.2%)。すなわち6世紀第4四半期~7世紀第1四半期に属する。1 σ より確率の高い2 σ (2標準偏差)の値は561A.D. ~ 643A.D. (95.4%)で、6世紀第2四半期~7世紀第2四半期となる。

最終形成年輪がないことを考慮すれば、限りなく7世紀代に近い6世紀末頃と想定することができ、楔形柄頭の倭系大刀のなかでも最終末段階のものと考えることができる。

(以上、樋上)

木製把装具の位置

古墳時代における木製の大刀の外装は、遺存状況によって大きく左右されるため、その実態は明らかでない部分が多い。特に、惣作遺跡の木製の大刀の把は先述の通り、置田分類B類(楔形把頭)に分類されるが、把頭の平面形が倒卵形を呈する点において、大多数の置田B類(楔形把頭)とは異なることから、現状における比較検討は容易ではなく、若干の再整理も必要である。

白石太一郎は町田章の研究(町田1988)を受け、倭風の楔形大刀について、倭風の拵えの大刀全体を示す類概念として「楔形柄頭大刀」、種概念として板状で楔形の把頭をもつ大刀を「梯形柄頭大刀」、把頭の平面が楕円形または卵形を呈する把頭をもつ大刀を「楕円形柄頭大刀」と呼称することを提唱した(白石1993)。この提唱に従い、ひとまずは惣作遺跡の木製把装具を「楕円形把(頭大刀)」として呼称する。

白石太一郎が「楕円形柄頭大刀」として呼称する大刀として藤ノ木古墳の大刀3・大刀4(TK43型式期)、綿貫観音山古墳の鉄地銀象眼振り環頭大刀(TK43型式期)がある(図7)。惣作遺跡の木製把装具は把頭の平面形が円形、側面形が台形を呈する点は藤ノ木古墳の大刀3・大刀4に類似するが、把頭に懸通孔を有する点、把縁が他の「楔形柄頭大刀」や大刀3とは異なって幅広にならない点は大刀4によく類似する。段を有して狭くなる把縁側には、別材

の把縁装具が装着される可能性もあるが、置田B類(楔形把頭)の把装具はいずれも一木造りであることから、その可能性は考えにくい。とすれば、藤ノ木古墳の大刀4、綿貫観音山古墳の振り環頭大刀と同様、把縁には小さく突出する鍔(の機能を有する装具)を装着する構造であったことも推測される。また、把縁を小さくして、茎を落とし込む溝を把縁の位置で刃側に段を設けて深く切削する造作は、6世紀以降における把縁の構造の簡略化(小林1986)がより顕著に表出したもので、関の切り込みが深くなる鉄刀の変化(白杵1984)にも対応したものと捉えられる(図8)。

楕円形把頭大刀は、町田章が予測したように(町田1988)、4世紀から6世紀にかけて存続したと考えられるが、惣作遺跡の木製把装具の年代が放射性炭素年代測定の結果、6世紀後半から末頃と推定されたことは、藤ノ木古墳の大刀4との類似、把装具の構造からしても矛盾がない。このことは同時に、「楕円形把頭大刀」が6世紀後半の近畿地方から東海、関東地方にかけて分布すること、あるいはそれが畿内の有力支配者層から地方にまで共有されていたことを示す。

また、惣作遺跡の木製把装具の構造に他の置田B類(楔形把頭大刀)の把装具と異なる点が認められることは、藤ノ木古墳の大刀4の鞘縁と鞘尻の幅がほぼ等しく、鞘尻の幅が広くなる他の倭風の大刀とは異なることが指摘されてもいるように(関川1993)、「楕円形把頭大刀」の系譜、構造上の変化が単純ではなかったことを示唆する。現状の資料からすれば、「梯形把頭大刀」が古墳時代中期から後期を通じて普遍的に存在し、大刀形埴輪のモチーフとしても主体を占めたと考えられ、「楕円形把頭大刀」は倭風の大刀としては相対的に少数派の大刀であったと考えられる。

いずれにせよ、惣作遺跡の木製把装具は古墳時代における大刀の外装の構成と変化を明らかにする重要な一資料であることは間違いない。今後、同様の木製把装具の出土例が増加すること、出土地点周辺の調査によって、より詳細な出土状況が判明することが期待される。

(以上、早野)

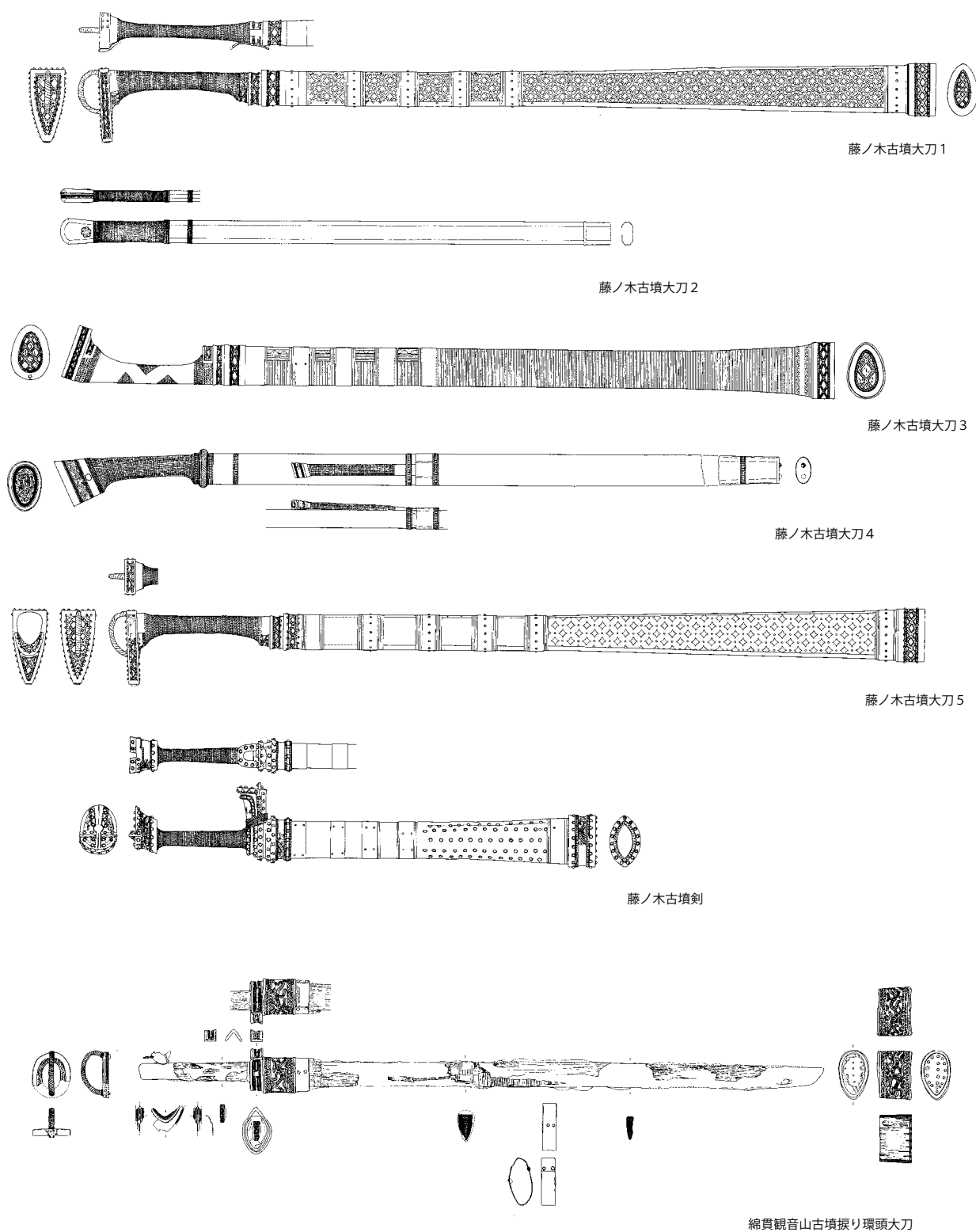


図7 藤ノ木古墳と綿貫観音山古墳の刀劔 (1:10)

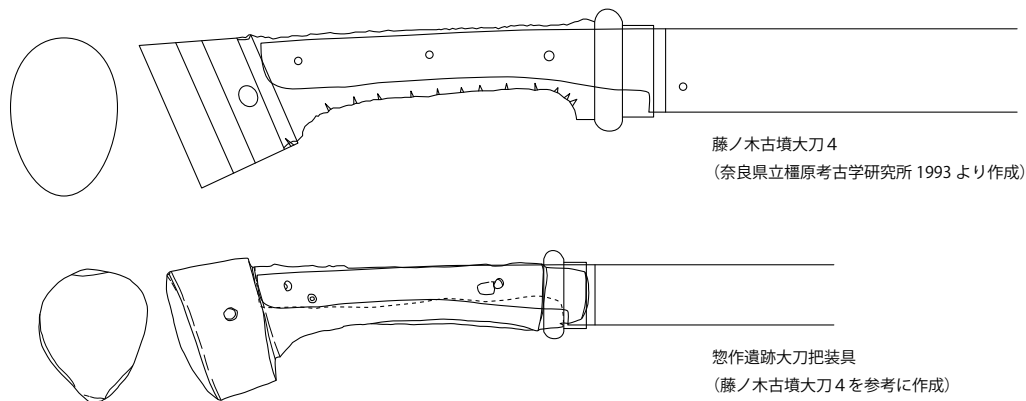


図8 大刀の構造復原案 (1:4)

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 2012 『惣作遺跡Ⅱ』

白杵勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」 『日本古代文化研究』 創刊号 古墳文化研究会

置田雅昭 1985 「古墳時代の木製刀装具」 『天理大学学報』 第 145 輯

群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 255 集

考古学フォーラム 2013 『変貌する弥生社会 安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』

小林行雄 1986 「古墳時代の大刀」 『研究紀要』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

白石太一郎 1993 「玉纏太刀考」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 50 集 国立歴史民俗博物館

関川尚功 1993 「刀剣類について」 『藤ノ木古墳』

永井邦仁 2012 「惣作遺跡」 『平成 23 年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』

奈良県立橿原考古学研究所 1993 『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』

樋上 昇 2012 「出土木製品からみた弥生時代後期～古墳時代前期の鹿乗川流域遺跡群」 『惣作遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター

鈴木一有 2012 「生産と流通Ⅵ 武器・武具」 土生田純之・亀田修一編 『古墳時代研究の現状と課題 下』 同成社

町田章 1988 「三重県井田川茶白山古墳の鉄地銀象嵌掘り環頭大刀について」 『井田川茶白山古墳』 三重県埋蔵文化財調査報告 26 三重県教育委員会

山内紀嗣 2003 「木製刀装具からみた大刀生産」 『鉄器研究の方向性を探る 刀剣研究をケーススタディとして』 第 9 回鉄器文化研究集会資料